

はいあがる力をいかに身につけるのか

園長 児嶋 草次郎

友愛社周辺は、すっかり緑に包まれ、草や木々が躍動しています。1年間の中で一番大地のエネルギーを感じる季節を迎え、朝目覚めると、太陽と大地の空気・匂いが我が身を外に導き出してくれます。そういう中、今年は4月末に、園庭の木々の剪定等を茶臼原の緑ヶ丘造園さんにしていただきました。散髪でもしたように木々も気持ちよさそうです。庭木も放っておくと、カズラが絡みついて枝を被ったり、ツツジ等が徒長してしまっただけで選定をするのに素人の手には負えなくなってしまうことがあります。何年かに1回は、専門家に整備をしてもらう必要があります。

さて、今回は、主に保育園（10か園）の園長たちや主任たちに4月に話したことを、再構成して掲載させていただきます。年度初め、互いに危機感を共有したという思いでした。

水田の上で約150匹のこいのぼりが元気に泳いでいます。4月11日（土）に、後援会「石井十次の会」の御支援で今回も揚げることができました。日々、親子づれ、カメラマン等が入れ替わり見に来られ、すっかり茶臼原の風物詩となって定着しています。そして友愛園の子供たちだけではなく、地域の多くの親子に感動・希望を与えていると思います。日本の伝統文化を伝承する、地域貢献ともなっていると思います。

このイベントは、もともと20年前、後援会の主催する行事として始まっています。最初の頃は、石井十次墓地に隣接する畑の上に揚げていました。その時の会報につきのように記されてあります。

「設立10周年記念イベントとして、石井十次が孤児救済・教育するため、岡山孤児院を創立し、茶臼原に移住したこの大地にこいのぼりを揚げましょう。という企画が実現しました。」

その後、後援会の方々も高齢化して来ましたし、地域の農家の畑にこいのぼりが落ちて御迷惑をおかけするということもあり、場所を友愛社の静養館前の水田に移し、主催者も石井記念のゆり幼稚園、ひかり保育園、やまぼと保育園三園の協同ということにしました。もちろん電柱に登る人は、後援会時代からの人に引き続いてやっていただいています。次の話が重要です。

もしこのこいのぼりあげを、最初から友愛社の保育園主催でやっていたら、20年続けることができたであろうか。多分できてないと思います。職員の都合が優先するようになり、できない理由を考え、数年で途絶えた事だろうと思います。昨年、高鍋町のせいごろう亭に、支援者のみなさんから寄贈いただいた多くのひな人形や五月人形等を、各保育園から2、3人ずつ職員が集って、所狭しと並べました。しかし、今年は、私から何の指示も出してないので、常識レベルの数しか並んでないようでした。多くは倉庫に眠ったままです。来年は、六日町とか十日町の商店街の皆さんに、一緒に飾りませんかと話してみてもどうかと思います。

各保育園周辺にはそれぞれ後援会「石井十次の会」の方々に住んでおられる。そういう方々のお力をお借りするという発想も持たねばならない。保育園も地域の過疎化と少子化の流れの中で、淘汰される時代を迎えています。これからそれぞれの地域の中で生き残っていくためには、地域の人々の力も借りなければならないし、また、保育園が核となって、地域の文化や人の和作りに貢献していかね

ばなりません。

管理者だけに任せるのではなく、職員たちからも提案があってもよい。職員を集めるにしても子供を集めるにしても、みんなで動かねば生き残っていけない時代だと思う。

ある雑誌（PRESIDENT 2026、4・17）に、アメリカ野球界で大活躍する大谷翔平選手のことを載っていました。「ハーバードが大谷翔平を教材にした理由」。リーダーシップ論を専門とするハーバードのフランシス・フライ教授が大谷の「徳」と「品格」に感銘を受け、教材にしたというのです。次のように書いてあります。

「大谷選手のケースが教えてくれるのは、夢を実現するためには、いかに野心を解き放ち、達成すべき目標を設定し、日々、規律ある行動や振る舞いを実践することが大事か。これは学生たちだけではなく、あらゆる人々にとって学びとなるものです。」

そして、次のように書いてある所に注目しました。

「一般的に、野心とレジリエンスを併せ持つのは、とても難しいことなのです。逆境から立ち直ることにフォーカスすれば、野心は後回しになってしまう。逆に野心を抱いて、成功することばかりに気をとられてしまうと、レジリエンスは弱まってしまいます。

ところが大谷選手は野心とレジリエンスの両方を持ち続けてきました。それどころか、野心がレジリエンスを強めレジリエンスが野心を強め、両方をどんどん強化させている。これは極めて稀な事例です。」

野心を志（こころざし）と言い変えることもできるし、レジリエンスとは、逆境や失敗から立ち直る力と説明がしてあります。これはまさに、児童養護施設に来る子供たちのテーマでもあります。

家において虐待を受けたり、ネグレクト状態に置かれた子供たちの多くは、人間に対する信頼がありません。また家において、自己コントロールができず、親に迷惑をかけて来る子供たちもいます。そういう子供たちが志を持つということは至難の業です。グチ・不満や衝動性が先に立って、とても将来のことを考える余裕はないのです。レジリエンスをどう身につけるかが課題なのです。

石井記念友愛社の研修館の西側の壁に、藤島武二の「ライオン教育の絵」が掲げてあります。石井十次がこの絵の前で少年と一対一になって対座している写真も残されています。『獅子（しし）』が千尋（せんじん）の谷に我が子を突き落とすという中国の古い話を題材にした絵です。私はその写真を次のように解釈しています。石井十次の少年に対する話です。

「君は近々社会に自立する。自立するとは、このライオン教育の絵のごときだ。崖から突き落とされることだ。君は、岡山孤児院の教育でもって充分にこの崖をはい上がる力は身につけた。困った時はいつでも助けてあげるけど、しっかりがんばってはい上がり、世界をめざせ！」

大谷翔平選手は、花巻東高校時代、3年間寮生活をして、野球部の監督さんからみっちり教育を受けています。もちろん少年時代からの野球教育もあったでしょうが、寮での集団教育の中で身につけたレジリエンスが多かったのではないのでしょうか。

「高校時代『楽しいより正しいで行動しなさい』と言われてきたんです。」と彼自身が述べているようです。「大谷翔平 86 のメッセージ」見玉光雄。「他人がポイッと捨てた運を拾っているんです。」と球場でゴミ拾いをするを説明しているところも、監督さんの指導なのでしょう。

個人主義の時代、集団教育は否定されがちですが、彼にとっては、幸運な学ぶ機会となったのでしよう。

一方、児童養護施設はどうか。年々、その教育力を失っているのではないかと思います。

4月15日の「宮崎日日新聞」で、南九州大学内に不登校の中学生を対象にした学びの多様化学校「あ

やめ野中」が20日に開校すると報じられていました。宮崎県内では3校目になるのだそうです。不登校の中学生は2024年度全国で21万人にのぼるとか。児童養護施設で生活する子供たちが2万2000人くらいですから、不登校問題は深刻な状況になって来ているということなのでしょう。他の記事を見ていると、不登校児が夜間中学等にも流れていっているようです。

昔はけっこうな数の不登校児が児童養護施設に入所して来ていました。何か月間か学校に行かなかった子供でも、集団の力動で、次の日からみんなと一緒に登校するという状況は見られました。いわゆる行動療法的な指導です。「みんなで渡れば恐くない」の心境です。そうこうしているうちに、生活習慣も身につく、スポーツや労作を通してレジリエンスも体得して自立していきました。

しかし、時代状況も変わりました。子供の最善の利益の名のもとに家庭優先の原則が政策となり、施設はどんどん縮小され、この10年で全国で5000人ほど入所児童は減少、不登校の子供たちは、児童養護施設の対象外となって来ています。そのために莫大な税金を使って、不登校のための学校が設立されるようになったと言ってもよいでしょう。

私がここで問題にしたいのは、いわゆるレジリエンスをどこで習得するのかということです。ただ子供たちを表面上大切にするだけでは、力をつかないのです。価値観の多様化した時代ですので一概に言えないのですが、不登校で苦しんでいる子供たち、親御さん方のニーズに児童養護施設はもっと答えてもよいのではないかと思います。きれいごとを言ってるつもりはなく、果たして国の政策は、子供たちの未来のために進化しているのでしょうか。日本の未来は大丈夫なのか。

4月15日に財団法人石井十次顕彰会主催の石井十次生誕記念式典が開催されました。その中で小・中・高生の意見発表があったのですが、感動的な文章に出会いました。高鍋東中学校3年の、田中千博（ちひろ）君の作文です。

「石井十次先生は、子どもたちを深く愛し、支え続けた高鍋の偉人です。私は幼い頃から先生の温かい精神に包まれて育ってきました。通っていた保育園が石井記念友愛社の施設で、園の行事を通して先生の考え方に自然と触れていたからです。とくに心に残っているのは、茶臼原で稲刈りをした経験です。広い畑の真ん中で稲を刈りながら、『ここが石井先生が開拓した土地なのか』と胸が熱くなったことを今でも覚えています。」

どうやら田中君は石井記念明倫保育園に在籍されていたようです。あなどるなかれです。幼児の時代の体験でも、しっかり記憶に残っているのです。保育園時代の体験がしっかり田中君の人格の基盤になっているのだろうなと感じました。

石井十次の理念を背負う各保育園は、しっかりこの事実を確認し合わねばなりません。レジリエンスは、児童養護施設だけの問題ではないのです。

新聞の切り抜き等をもとに情報共有のための話をしたのですが、ここに書くのはその一部です。世界、社会の情勢の変化がめまぐるしく、若い人たちはあまり新聞を読まないで、できるだけ全国紙2社、地元紙1社に目を通し、必要と感じた記事については切り抜くようにしています。友愛園の職員会議でも、毎月そのコピーを配るようにしていますが、最近その量の多さに驚きます。

最後に、友愛園の職員それぞれの年間反省を読んでの、私の評価反省の一部を書かせていただきます。少し文章は変えてあります。

職員たちの年間反省の中で、9月から10月にかけての、岡山研修旅行（2グループ 後援会「石井十次の会」の会員の方々と同行）に行った事を記していたのは2名のみだった。もうほとんど職員の中の頭の中には残ってないのだと思う。この研修は4、5年に1度くらいしかやってないので、特別な1年であった。石井記念友愛社創立80周年を記念する行事でもあった。

鳥の目的な視点がなくなると、書いてある反省が井の中の蛙がグチグチ不満を言っているように聞こえてしまう。

我々は石井十次の理念を背負ってこの仕事に従事していること、「石井十次の会」（我々、子ども達にとっては、日本国民の代表）の方々の期待、信頼に答えるべく、日々努力していること、この2点を忘れてはいけない。行政や児童相談所だけが我々を監視しているわけではない。

岡山にも多くの同志がおり、それぞれの方々が日々色んな問題と向き合いながらも、石井十次の理念の具現化に向けて努力を重ねておられる。

石井十次は、子供たちにただ食事を与えて肉体を成長させ社会に放り出したわけではない。最高の自然教育を授けて、社会でしっかり自立できる人間とした。

我々も、目の前の子供たちの能力・資質をしっかり見極めながら、その可能性を引き出し、自信と自己肯定感を身につけ、生活習慣の確立した人間として、社会に自立させるべく努力を重ねていかねばならない。そんなことを書きました。

5月5日、今日はこどもの日です。地元紙には本日が立夏で、都城市で24度が予想されると記されてありました。4日、沖縄は梅雨入りしたとも。年々春が短くなる感じです。雨も多く、ここでは春の草花たちもあまり育たないままに腐ってしまうようになりました。一方秋のサルビアは冬を生きのびるものが出て、もう真っ赤な花を咲かせるようになり、マリーゴールドも、こぼれ種からどんどん芽を出し成長しています。

地球温暖化がいかに進もうとも、人間はこの地球上で生きていかねばならないし、私たち大人は、子供たちにはいあがる力を身につけさせ、未来へ導いていかねばなりません。私も、後期高齢者の一員ですが、もうしばらく頑張ろうと思います。